

第 51 回大阪府学校教育審議会 概要

1 日時 令和 6 年 5 月 23 日（木）14 時 00 分から 16 時 10 分

2 場所 ホテルプリムローズ大阪 3 階 高砂（大阪府大阪市中央区大手前 3 丁目 1 - 43）

3 出席委員

氏名	職名	分野	備考
明石 一朗	関西外国語大学短期大学部 教授	教育学	オンライン出席
浅野 良一	兵庫教育大学大学院 特任教授	教育学	会長
有明 三樹子	りそなビジネスサービス株式会社 専務取締役	企業関係者	
大継 章嘉	大阪教育大学 学長補佐 特任教授	教育学、 教育行政	
小田 浩伸	大阪大谷大学 教育学部長 教授	特別支援教育	会長代理 オンライン出席
川田 裕	学校法人常翔学園 理事	工学	
小酒井 正和	玉川大学 教授	ICT	オンライン出席
小原 美紀	大阪大学大学院 教授	労働経済学	オンライン出席
巽 葉子	大阪府公立学校 スクールカウンセラー スーパーバイザー	臨床心理学、 発達心理学 学校臨床	

4 審議会概要

(1) 入学者選抜制度のあり方の検討に向けて（ゲストスピーチ）

○会長より、進行について説明。

○1人めのゲスト大阪府立高等学校 PTA 協議会 布施高等学校 PTA 谷口 昌広氏が講演

<谷口氏>

- ・自己紹介
- ・PTA活動は7年経験があり、小中高でPTAの会長をしていた。結論から申し上げると、自分の子どもが成長できる環境が整っている高校を選択しているというのが共通事項だと思う。
- ・例えば、大学進学を希望する場合、そこにあった高校を選択する。あるいは大学進学はせず、高校卒業後は社会に出て働くという家庭の意向や子どもの意志がある場合は、詰め込み教育をするようなところではなく、のびのびと、社会性、道徳感、倫理性を学べるようなところ

を選択する。また、前提としては、学力に見合った高校。どこの高校にでも行けるわけではないが、いろんな考え方の保護者がいる。

- ・例えば今、大学全入時代と言われている中で、高校卒業後に就職する方もいる。私の子どものある友人は、成績は大変優秀だが、保護者は、大学なんて遊んでばかりなので高校卒業したら就職しなさい、という考え方。その保護者自身は大学には進学していないため、大学の良さをわかっていないのではないかと考えている。
- ・実際に私が聞いた具体的な意見を 11 件、スライドにまとめた。

①は、大学進学を考えたとき、公立高校に進学すると、ちょっと指導の内容が不十分で、個別に塾に通わせる必要があり、いくら公立の学費が安いといっても塾に通わせると私学の学費と大きな差がないから、最初から私学を選択したという意見。

②は、自宅から近い、または駅から近く通いやすい高校を選択したという意見。小学校や中学校ほど近くないとはいえ、近所にある安心感はあると思う。

③は、かわいらしい制服の高校を選択したというのは、女子生徒からの意見だが、私の子どももこういう観点で選ぶ場合もある。少し話が逸れるが、布施高校には制服があるが普段は私服登校が可能で、定期考査等のイベント時のみ制服着用のため、傷んでいない制服を持っている方が多くいる。成長にあわせて買い替えるのは負担になるので、PTAで、卒業生から制服を集めてリユースするプロジェクトを始めている。ただ、男子の制服は集まるが、女子の制服は集まらない。その理由を女子生徒の保護者に聞くと、女子は卒業した後も友達とテーマパークに遊びに行くときなどに制服を着ることがあるため、なかなか集まらないのだという。長い目でみて、可愛く着られる制服を求めているのではないかと思う。

④は、自由な校風の高校を選んだという意見。制服もそうだが、髪型等に関する理不尽な校則がない、入りたい部活動が活発、などの理由により選択している。

⑥は、近隣に遊べる場所がある大阪市内の高校を選択したという意見。これは大阪南部の方の意見だが、例えば休日に買い物で都心に遊びに行く場合、通学定期があれば交通費がかからないという理由。

⑦は、卒業後に就職に役に立つ技術が身につく高校を選択したという意見だが、全員が大学に行きたいわけではないと思う。

実は私も高専を卒業したら就職するつもりだった。高専入学後に、たまたま編入制度を知って、大学へ編入させてもらったが、そういった意見もあった。

⑧に、親の出身高校を選択したという意見もあった。やはり自分の出身校の印象が良いと、子どもにも熱く伝えると思う。お父さんがそんなに言うんだったら、すごく良い高校だから行こうかなとか、お母さんがそんなに好きなら行こうかなと思ったという意見もあった。

あと、⑨、⑩は入試に関する意見だが、⑨は一発勝負の入試なので、確実に合格できる公立高校を選択したという意見。私の子どもの場合、高校入試の時期はコロナの影響で倍率が例年と異なり、このような考えの方がおそらく多くいて、例えば前年の倍率が 1.1 倍の高校が 1.3~1.4 倍だったりして、社会情勢によっても倍率はすごく変動するのだと思った。

⑩は逆に、私立に行くことも覚悟の上で、背伸びして魅力のある公立高校を選択したという意見。

⑪は、少人数制のクラスで授業ができるような高校を選んだという意見。コミュニケーションに不安がある場合は少人数制を選択する傾向もある。

こういった意見は、学費は公立よりも私立が高い、できれば安い学費で通わせたい、もちろん学力に見合った高校を選択するという前提のもとにある。

- ・次のスライドは、個人的な考えになるが、公立と私立のメリットとデメリットを簡単にまとめた。皆さん、大体同じような考えかと思うが、公立のメリットは、学費が安く、近隣にあること。デメリットは、校舎や設備が古く、先述したように進学のために塾に通わせる必要があるということ。私立のメリットは、校舎設備が新しく、学食が結構充実していること。あとは、充実した学習指導ができること。デメリットは、学費が高いこと。私立はどちらかという通いやすい都心部にあるため、ある人には近いかもしれないが、ほとんどの人からは遠いと思う。
- ・今年の公立高校の倍率にはすごく驚いたが、私学無償化を大阪府が実施した意味としては、家庭の経済状況により学ぶ機会を奪わない、平等に学ぶ機会を府民に提供するという政策だと理解している。そういった理念のもと、実施した政策で私立の志願者が増えているというのは意図通りではないかと思う。
- ・次が最後のスライドだが、私なりに公立高校の役割を考えてみると、7点ある。
 - ①は、大阪府の旧学区でトップの学校はかなり特徴的な高校であり、私の住む旧第5学区の高津高校のように、大学進学をめざせる魅力や特徴のある学びの場を維持することを挙げた。
 - ②は、府民の通いやすい近隣に特徴のある高校を増やす、統廃合の場所を考慮する必要があること。一番強く思ったこととして、公立高校が存在する意味は、公共性ではないかと思った。不便な場所には私学は学校を作らないが、不便な場所にも学びたい人がいればそこにきちんと受け皿を作るべきだと思った。
 - ③は、大学進学をしない子どもたちを、自信を持って社会に送り出せる教育のできる高校。
 - ④は、中学校の学習活動、調査書を重視し、一部英検等は認められていると思うが、資格取得を入試に考慮する、中学校からの推薦枠を高校に設けること。
私の子どもは指定校推薦で大学に行った。子どもの態度を見ていると、やはり普段から勉強している。ある時期だけ特化して勉強しても推薦はもらえない。でもそれが結構大事で、推薦制度が学習の習慣を醸成しているのではないかと思うので、それを中学校に広げてもいいのでは、と個人的に考えた。
 - ⑤は、これも社会問題だが、他校での不登校の生徒を受け入れて支援するような機能がある高校があってもいいのではないかと思う。
 - ⑥は、人生100年時代で、セカンドキャリアのために学び直しとかリスキリングという言葉が使われるが、その言葉には大学というイメージが何となくあると思う。大学だけでなく、高校から学び直す時間も十分あるので、社会人の枠を設けてもいいのではと思った。
 - ⑦は、高校卒業後に海外の大学を受験できる資格を付与できるような教育があってもいいのではと思った。最近では日本の研究者が海外留学するケースが減少しており、残念に思っているが、高校がそれを後押しできるような仕組みがあってもしかるべきだと思った。
- ・最後に、高校の魅力・特徴について考えてみると、一つは日本の文化の創造者を育てること。今、日本の文化として、漫画やアニメ、ゲーム、フィギュアなどが新しい日本の文化として

海外で認められているが、それを大学・専門学校からでなく、高校から学べるようにしてもいいのではないか。また、伝統工芸を支えるような高校があってもいいのではないか。

- ・あと、繰り返しになるが、不登校生徒を再度登校させること。不登校の子どもは私の周りでも増えていて、高校の協議会での講演会等においても、そういった不登校の子どもとのコミュニケーションの取り方について今年も何回か講演したが、例えば、不登校の経験がない人が不登校の子どもの話を聞いて、理解しようとしても、本当に心から理解はできないと思う。でも、実際に不登校を経験した人が指導者や教師にいたのであれば、すごく共感できるだろうし、共感していることも、不登校の生徒に伝わるのではないかと思う。そういったことを考えてもいいと思う。
- ・あとは、キャリアプランが立てられること。海外の大学を卒業して世界中で活躍できる人材になれる、世界中に友人ができるなど、今後も海外で活躍している人は増えていくと思われるため、それを支えるようなプランを立ててスタートがきれ高校があってもいいのではないかと思う。

○委員とゲストによる質疑応答。

<浅野会長>

- ・様々、高校を選択した理由と、私学の無償化の影響があることをお伺いしたが、高校を選ぶ場合、保護者の意見と本人の意見のウエイトはどの程度か。
- ・例えば私立の中学校であれば、当然保護者の意見のウエイトが高いと思う。大学になると本人のほうが高いかもしれない。
- ・高校の場合、もちろん人によって違うと思うが、肌感覚ではどうか。学費が安いから行くというのは本人より親の意見かと思う。

<谷口氏>

- ・中学生になると自分の家庭状況について感じ取っているため、ある程度汲み取る子どもも多いが、概ね本人：親が6：4かなと思う。

<浅野会長>

- ・中学校の進路指導の先生や、塾の先生もかなり影響するものか。

<谷口氏>

- ・私の経験から言うと、塾の先生は結構親身になって寄り添ってくれた。中学校の当時の先生は結構クールだった。人によるかと思う。

<明石委員>

- ・保護者からの立場で、高校進学 of 動機等、よくわかった。特色ある高校を選択するときに、どういう情報源・ルートで選択しているのかお聞きしたい。

<谷口氏>

- ・中学生に向けた高校紹介の場が年に何回かある。私も子どもと高校の合同説明会に参加した。そういったセミナー形式の場に自ら行くか、あるいは各校のオープンスクールに参加して、実際の教室や、食堂、体育館等を見学する。そういう場に中学生が能動的に動いていく。ただ、それらがなかなか浸透してないようなので、SNS等を使って発信の仕方を変えていった方がいいのかもしれない。自分に合った高校があることに気づけない。
- ・今は中学生でもスマホでいろんなことを調べているため、そこで情報を与えて、能動的に動かすという動機付けをした方がいいのではと思う。

<浅野会長>

- ・やはり、高校を選ぶときは、単なる紙情報等、そういった情報ではなくて、位置情報や現物に当たるといのは、皆さんやっているのか。

<谷口氏>

- ・やはり紙やインターネット等だけで選ぶのはリスクがあると思う。

<浅野会長>

- ・説明会へ行ってブースで話を聞いたり、あるいは学校のオープンスクールに行ったり、ということか。

<谷口氏>

- ・オープンスクールのところでは、生徒もボランティアで、立ちながら説明してくれたり、その子どもがすごく良ければ、「この高校はいい」と保護者も思い、自分の子どももこうなってほしいと思う。

<浅野会長>

- ・外的な条件、例えば、大学進学にどれぐらい行っている、あるいは修学旅行はどこかというよりも、そこで出会う子どもたちの現状はかなり有力な情報になるのか。

<谷口氏>

- ・子どもにとっては、修学旅行にどこへ行っているとかは、多分すごく重要なことだとは思う。一方、自分の子どもがその高校に行ってよかったなと思ったのはオープンスクールであり、生徒の人間性かと思う。

<巽委員>

- ・2点質問だが、1点めは、中学の進路指導について。先ほど、中学校の先生がちょっとクールだったと仰っていたが、逆に中学側としてどのような進路指導をして欲しかったか、また、中学から子どもや保護者にどんな情報が欲しかったか。

<谷口氏>

- ・子どもの学力に見合った高校の中から、こういう高校に行くと子どものこういう力が伸ばせるのではないかと、という指導の仕方があった方がいいと思う。

<巽委員>

- ・もう1点は、不登校について。
高校のPTA会長をされていたご経験から、実際には高校に入って不登校になる子どもや、中学校で不登校経験があり、高校へ入学したものの継続するのが難しそうになった子どもに、高校としてどのような教育相談やサポートをするのが良いか。

<谷口氏>

- ・あまり詳しくはないが、去年卒業した生徒数は、入学時よりも10数名減っていた。校長先生に聞くと、コロナで入学式等がなかった世代で、うまく高校に馴染めなくて不登校になり、退学していったとのこと。高校ももちろんそれを問題視していて、SCなど様々な制度のもと指導しているが、SCを申し込んでも1~2ヶ月先になる。今話を聞いてほしいのに絶望するという話もある。人材のリソースの問題もあると思うが、そこをもう少しリアルタイムに、声を上げたら今すぐ話を聞けるような体制が必要ではないかと思う。

<川田委員>

- ・進学のために、公立だったら塾で学習が必要で、私立の場合は予備校的な授業もやっているということを仰っていたが、塾での学費が等しい場合、塾での学習分だけ公立の方が、学費が高くなるということになるのか。

<谷口氏>

- ・客観的に見るとそうだが、私立の授業料無償化も、様々な備品等はおそらく公立でも高いと思うため、それなりにかかるとは思いますが、それを鑑みても、やはり公立の方が高く感じると思う。

<大継委員>

- ・2点お伺いしたい。1点め、高校選択の理由を、府のPTA協議会の中でおまとめいただいたが、府全体で見たとき、地域間での意見の違いや偏りはあったか。

<谷口氏>

- ・PTA協議会は旧学区から1校ずつで構成されるため、一応、大阪府全域をカバーしているものの、各構成員が各地域を代表していると捉えるのは乱暴な意見になってしまうが、市外の方がのびのびしているような雰囲気今年メンバーから受けている。

<大継委員>

- ・もう1点、公立高校の役割のところ、ご経験の中でも推薦枠、一定のプロセスを経ながら学習習慣も兼ねて選んでいく方がいいと仰っていたが、高校の選抜の段階でそれを導入していくことについては、公立の場合はまだハードルがあるではないかと議論していた。この辺りはいかがか。

<谷口氏>

- ・試験のスコア重視になると、スコアを取るための詰め込み勉強というか、試験が終われば忘れてもいい、となってしまう。そうではなく、日々勉強する、学んでいくという習慣を学ぶのが学校だと思う。
- ・そこに興味を見出して自分が興味のある専門性を深めるために大学に行くという、そういう指導をするのが中学・高校の役割だと思うため、あまりスコア重視ではなく日々の提出物等がその先自分の進学にも繋がる、という意識を持つと意欲も上がると思う。

<浅野委員>

- ・冒頭に、成長できる環境は整っており、そこから大学へ進学できる学力をつけていく、あるいは仕事につく、と仰っていたが、他に、例えば何か一芸を入れて、将来、専門職になる等、そういう心の成長などはいかがか。

<谷口氏>

- ・勉強の話ばかりしていたが、例えば一つのスポーツに取り組んで、それである程度の成果を出せる人は、その一つのことでも自分に自信を持てると思う。自分に自信を持ると他のことにも意欲的に取り組みやすくなるので、例えば勉強が得意な人は勉強で自信を見いだせば良いし、スポーツでも良い。いろんな子供がいろんな個性で自信が持てることが成長であり、保護者が願うことの一つでもあると思う。

<浅野会長>

- ・次は村田校長先生、よろしくお願いします。

<ゲストスピーカー | 村田校長>

- ・大阪市立我孫子中学校の村田光直と申します。中学校から見る高校入試と、今後の公立高校入試に望むこととして中学校における進路指導の状況や、中学生の変化や中学校教員が高校入試をどのようにとらえているか、また、今後の公立高校に望むことをお話します。
- ・中学校長として、子供たちを取り巻く環境や様子を見てみると、この10年で大きく状況は変化していると感じている。かつての高校進学では、生徒と保護者の学校選択は学力と家庭の経済状況が観点で、通いやすさや部活動も大きな意味をもっていた。経済状況が苦しい家庭にあっては、公立の選択の必需性が大きなポイントであった。
- ・一方で、不登校傾向の児童生徒が増加しつつあった近年、コロナ禍もあり教育活動や人とのコミュニケーションの制限を児童生徒は経験した。そのような中、ICT環境が急速に普及し、学校に行かなくても学習できる環境が整備され、不登校または不登校傾向のある生徒が

さらに増加している。障がい等により、配慮を要する生徒等も増加しており、個別に必要な教育を行っている。

- ・現在の高校進学では、年々、私立高校への希望者が増える中、平成 23 年の一部授業料無償化制度や今年度より段階的に導入である私立高校等授業料無償化制度により、家庭の経済状況によらない学校選択が可能となってきている。
- ・中学校における変化として、かつては、進路指導の中心を担う進路指導主事という教員は、経験年数が多く、各高等学校の特徴を熟知しており、特に学区があった時代は、地元の高校の数が限られているため、高等学校の特徴の把握が容易であり、中学を卒業した高校生の様子や高校を卒業後の様子も聞くことができ、進路指導に必要な情報の把握や共有は十分であった。
- ・現在は、教職員全体の平均年齢が下がり、経験年数の少ない教員が進路指導主事を担当するようになり、かつ、公立高校の通学区域は府内全域となったため、高等学校の特徴の把握や共有ができにくいということが課題となっている。加えて、統廃合や名前の変更、高等学校の変化もめまぐるしく、地元の高等学校であっても、どんな高校か、どんな生徒に合っているかなどの情報を仕入れにくいことも多く、進路指導主事を中心に、中学 3 年を担当、担任する先生方は、情報収集など勉強しながら進路指導を行っている。
- ・中学生・保護者の高校に対するニーズとして、中学生は、ドラマのようなキャンパスライフを思い描いたり、高校卒業後の進学先、就職、取得できる資格などに注目をしている。私が高等学校に勤務していたとき、高校 3 年生の進学指導をしている際、「先生、普通科大学ないんですか。」と聞かれた。18 歳でもこのような質問があり、15 歳の中学生は、まだ自分が何者であるかははっきりしている生徒は多くない。そのため、高校進学にあたり、進路選択が幅広い、普通科志向は強いように感じる。高校 3 年間や大学も含めた期間の中で、自分とは何か、何がしたいのかということを考えていく時間にしたいと考えている生徒は多いのではないか。
- ・保護者にとって、学校選択は、何よりも次の進路先が確実に決まることが重要で、その上で高校卒業後にどのような進路選択ができるのかまで見据えた選択をしている。そういう意味では、大学に附属する私立高校などはニーズにマッチしていると言える。また、高校 3 年間でどのような成長させてくれるのか、毎日元気よく学校に行くことはもちろん、卒業後の自立、成長を見通した広い視点で考えている。したがって、高校生活が楽しいだけでなく、高等学校を卒業したその後の姿まで見せてほしいと考えているのではないか。
- ・中学校の進路担当者の視点で、現在は進学希望者にとって、大学同様、高等学校も全入の時代であり、大阪では授業料無償化制度により、公立私立を問わず、学校選択ができる。したがって、進路担当者としては、生徒本人が自分の進路をしっかりと選択することを重視しており、進学先が公立・私立のどちらかがどちらであるかは問わない。中学校においては、経験年数の浅い教員が進路指導に当たることが多くなっている中で、高等学校からのアプローチを見ますと、公立高校は、学校説明会等を実施していただいているが、教員が個別にお話を伺う機会は少ないように感じる。私立高校においては、学校説明会等に加え、広報専門の先生が中学校に訪問され、具体的なお話を伺う機会があるなど、中学校に入る情報量が公立・私立に差がある。進路指導に当たり、まず中学校教員が各高校を知ることが大事で、そのた

めにも、中学校教員を対象とした、より詳細で参加しやすく頻度の高い見学会等や連携が必要であると感じる。

- ・義務教育における学びの状況も変化している。令和3年より新学習指導要領が全面実施され、子どもたちがこれからの時代を生き抜くための競争する力や、新たな価値に繋げていく力の育成が求められている。さらに、令和の日本型学校教育の推進により、個別最適な学びと競争的な学びの充実を行い、多様な子どもたちを誰1人残すことのない教育が求められている。中学校においては、これらの目標を達成すべく、以前の一斉型授業からグループワーク、1人1台端末を活用した学習、プレゼンテーション、地域や企業と連携した学習など、体験すること、表現すること、学びを深めることにも取り組んでいる。
- ・高校入試は中学校の学びから見ると、一つのメルクマーク（中間的目標）であり、達成度の指標の一つにもなると同時に、生徒にとっては、自分の目標に向かい向き合い、大きく成長する機会であると思う。中学校の学びの形態は変化していて、このような変化を踏まえ、中学校における新たな学びと繋がる入試制度も必要ではないかと考える。
- ・公立高校入試の現行制度を振り返ると、大阪では、志願する全ての人に対し受験する機会を保障している。特に、配慮を要する生徒の受験保障などは継続していただきたい。加えて、現行の3月中旬に一般選抜を行うことで、中学生は最後まで学びに向かうことができる。さらに、原則5教科型の受験は、どの教科も均等に勉強するという意識づけにもなり、基礎的学力の育成には必要である。現在行っているアドミッションポリシーによる合格の仕組みは、1点刻みの評価ではなく、生徒の多面性を評価するなど、中学校の学びに向かう態度も評価いただいていると考える。ですが、この制度による合格者は、若干名で、導入時の理念が薄れているのではないかと懸念している。加えて、制度に必要な選抜資料として、自己申告書があるが、全ての生徒の自己申告書を指導するのは、中学校において非常に負担感がある。アドミッションポリシーによる合格の理念を残しつつ、新たな制度を検討していただければと考える。さらに選抜方法については、現行制度は画一的だが、例えば、不登校経験のある生徒にとっては、5教科型の試験や面接による不安があるなど、学校選択のハードルになっているようにも感じる。
- ・最後にまとめとして、今後の公立高校入試に期待することは次のとおりである。中学校から見ると、高校入試は義務教育を終え、社会に向かうキャリア形成、自己実現の最初の第一歩である。そこに向かう生徒たちの意識や意欲状況は多様化しており、このような生徒を受け入れられる入試制度が必要である。それには、自分の個性や長所を生かすなど、中学校における学びの変化を踏まえた新たな仕組みを導入する時期に来ていると思う。しかしながら、多くの子供たちは、中学校の段階で自己理解、自己形成ができていないわけではない。そのような生徒にとっては、これまでの学びを踏まえたオーソドックスでわかりやすい入試制度も必要である。選抜日程については、早く合格を決めたい生徒、保護者は私立に流れているのは事実である。しかし、最後まで自分の行きたい学校にチャレンジしようと頑張り続ける生徒も多く見られる。残念ながら、早くに決まってしまう、学習をやめる生徒もいる。公立入試の日程を早めると、私立入試はさらに前倒しになることが容易に予測され、選抜日程が早まれば、中学校としては、入試までに教育課程を終わる必要があるため、教育課程を詰め込むような授業カリキュラムを組まざるを得ない。そうなれば、学びの確実な定着には懸念が生

じる。今一度、公教育である中学校や高校の役割から、入試方法や日程の検討を進め、慎重な判断をお願いします。

○委員とゲストによる質疑応答。

<小田委員>

- ・非常に興味深い貴重なご意見をいただき、本当に参考になった。2点お聞かせいただきたい。
- ・高校からのアプローチは、公立と私立であれば私立の方が、圧倒的に情報が多いということと言えるのではないか。この公立と私立のいわゆる説明の機会に違いもあるが、私立学校のどのような情報が中学校の先生方に非常に響いて受け止められているのか。例えば、教育内容、施設設備、卒業後の進路、どの情報を特徴的に捉えているのか。
- ・配慮が必要な生徒たちに公立か私立を勧めるにあたって、公立と私立はどのような条件なのか。配慮が必要な生徒に対する進路指導で何らかの視点があるならば、教えていただきたい。

<ゲストスピーカー | 村田校長>

- ・一つめの公立と私立の中高連携ということになるが、先ほどもお話したように、私立の先生方は、何度も惜しげもなく中学校に通われる。そこで、施設が綺麗で新しい、例えば食堂一つにとっても、正門一つにとっても綺麗なのは私立である。その辺りではなくて、先生同士が信頼し合える関係になるためには、やはり人と人が会わなければいけないと思っている。私立の先生は来られる先生はお一人・お二人だが、学校での取り組みや、生徒と向き合う姿勢が、私立はわかりやすい。公立の先生方とは接点が少ないか、頻度が少ないと思う。私自身が公立高校の教員だったので、高校の教員として中学校に出向いていくのが、行く段階で「どうしてこんなことをしなければいけないんだろう」という思いもありながら、行って中学校の先生に、「公立の先生ですか、パンフレット置いてくださいね」で終わりであった。だから私が今一生懸命やっているのは、公立の高校の先生に「中学校に行ってください」、中学校の先生方には、「どうか優しい目で受け入れてください」ということを話している。このあたりが私立と公立の違いかなというふうに思う。
- ・二つめの配慮を要する生徒については、私立の高校では、配慮していただいている高校も、あまり配慮のない高校もある。入試、入学後ともに配慮がないところもたくさんある。これは学校によって大きく違い、公立とか私立という言い方ではくくれないような区別の仕方だと思う。

<小田委員>

- ・私が知る限り、例えば特別支援学級に在籍していると、いわゆる内申が選抜には合わせにくいというところがあるが、公立と私立のどちらが進んでいるのかを、再度新たに聞かせていただきたい。

<村田校長>

- ・評価には、5段階評価と文章記載による評価があるが、文章記載では少し評価になじまないということで私立では少し受け入れがたいというところもあり様々である。それについても先ほどお話をしたように、進路指導主事がこの学校はこんな感じだということを知っていて子どもに指導しているというのが現状である。

<川田委員>

- ・卒業した後の子どもたちの姿をぜひ見せてほしいというような話について、これは具体的にどういう情報が、どういうツールで流れればいいのか。
- ・経験の少ない教員が進路指導をせざるを得ないということだが、何年かで教員が変わってしまうということは一つあると思うが、昔はどうやって対応していたのか。進路指導の先生をある一定程度長く止めるなどしたのか。今は、そのようなシステムがなく、情報も伝達できていないということか。

<村田校長>

- ・自身の経験だが、勤務していた高校で3年生は11月頃にほとんどの生徒は進路を決める。11月頃に、紙に写真を真ん中に貼り、「3年間、電気電子工学科に所属し、このような勉強を中心にした、クラブ活動でこのようなことした、〇〇学園に入って〇〇に就職します」のように作ると、生徒が中学校に喜んで持って行っていた。卒業後3年ぐらいたと、まだ担任の先生がいらっしゃるのでもそのような話をしに行く。これはいい制度だと思い、新しい転勤先で学力に不安のある生徒が多い学校で、同じことをしたが持っていかなかった。なぜかという、中学校にあまりいい思い出がないため行かなかった。中学校が子どもたちにもっと接点を持ったり、おっしゃったようなことをシステム化したりできればと思う。
- ・高校教員が、例えば生活指導面で課題がある生徒のことを中学校に聞きに行くと、個人情報の漏洩と断られることもある。中学校と高校の接点をもっとシステム化していかなければならない。中高連携でただ人と会うということではなく、システム化していくべきと思う。
- ・経験年数の少ない教員の進路指導については、教員全体の年齢が下がっているのでも、例えば担任を2～3回して、進路指導主事をするのが理想である。教員は10年前後で転勤するため、1校目で2～3回担任をして、2校目で1～2回担任をした後、進路指導をすると2～3地域の高校のことをよくわかっていて理想的だ。しかし、現在は着任後に担任ではなく、パソコンがよくできるから、よく物事を知っているからと、20代、30代で進路指導主事をしている。最近はそのような先生方が多いので、大阪府の進路指導主事会でも若手の進路指導主事の研修をすると参加者が多く、この数年はさらにそれが多くなっている。

<小田委員>

- ・先ほどの卒業後の姿という意味では、普通科高校の場合であれば、進学先とかの情報も欲しいのか。

<村田校長>

- ・これも高校教員の経験で申し訳ないが、例えば偏差値 54 で入ってきたが、関関同立へ進学した、偏差値 70 で入ってきたが、旧帝大へ進学したというような、生徒の伸びがどのくらいかが本来の高校の尺度でなければいけない。京大や阪大のような進学先だけ伝えたり、進学は無く、就職だけだと伝えたりすることに疲弊する必要はない。そのあたりを本来はもっと世に出していかなければいけないが、やっぱりどこに進学・就職しているかを見るので、その視点も変えなければいけないかなと思う。
- ・私立高校がこの時期に中学校に来ていただくと、個人情報であるので、データはもらえないが、3 年前の卒業生の進路や 2 年前の生徒の成績を伝えてくれる。私立の渉外担当の方と中学校の進路指導主事が何年も接点をもっていると、詳しく言っていたりすることもあるので、人と人との関係だと思う。

<明石委員>

- ・最後に高校入試に期待することとして、生徒の個性、長所を活かせる選抜のあり方と、一方ではオーソドックスなわかりやすい入試も期待されていたが、中学校現場から見られて、どのような選抜方法が望ましいのか、もう少し詳しくお聞きしたい。

<村田校長>

- ・オーソドックスの形を選ぶ、普通科を選択する生徒が圧倒的に多い。これは先ほど言ったように大学を見据えた高校進学や、中学 3 年生では自分の特色、特徴がわかっていない子どもたちがいるためではないかと思われる。この場合、オーソドックスな形がよく、もう少し増やしてもいいのではないかなとも思います。
- ・特徴を持った選抜としては、早くから何か物作りに興味がある、農業に興味がある、そのような生徒たちは、必ず学校を選択できる入試方法や高校選択ができればと思う。

<浅野会長>

- ・関連して、ミスマッチであった学校を選択した生徒はいるのか、本来は普通科に行けばよかったが、自分のそのときの関心や特技によって進路を決めて失敗したということはあるのか。

<村田校長>

- ・工業高校勤務時の経験から述べるが、退学率が一番多いのが工業高校であった。想定していたが、中学校で見るとあまり経済的には豊かではなく、高校を卒業して大学へ行かず就職するという考え方の生徒に工業高校を勧めていた。工業は、手先が器用で物作りが好きで、少し工学系、理数系のことに強くなければいけないが、そうではなく、就職がしたい、大学も行かない、早くお金を稼ぎたいという生徒に工業高校を勧めており、出席日数や実習などで合わずミスマッチで辞めていく生徒たちを何人も見た。中学校の先生は職業高校を知らないで、何度も高校をオープンにするが来ていただけないのは、宣伝の仕方が弱かった。
- ・もう一つ言うと、もっと学校公開をしてもらい、実際に行ってみないとわからないこともあるので、卒業生や在校生を見る、そして学校を見るという中高連携ができたらと思う。

<小原委員>

- ・とても勉強になった。中高連携の必要性もだが、高校進学した後にミスマッチを起こして辞めていくという情報を中学校の先生がどれだけ進路指導に活かせるかという話は、本当にどのようなところでも議論されているリサーチの議論で、教育にも当てはまっている感じがしてとても興味深い。
- ・私から質問は3つで、一つめは先ほど明石委員からのリプライにもあったが、アドミッションポリシーはやはり大事で維持はしていくでしょうが、具体的な新しい案が何かあればお聞きしたい。
- ・二つめは、3月半ばまで入試をすることの大切さはよくわかったが、同時に中学校の業務は大変になるのではないか。新入生のことも考えなきゃいけない時期であるし、ゴールまでが長くて今頑張れない子が十分に問題になっていると思う。そのゴールまでが長いと頑張れないことが様々な他の要因とリンクしてしまっているのが最近の特徴だと思う。長くなればなるほど、先生の負担についても全然考えなくて大丈夫なのか。
- ・三つめは、経験年数の少ない先生が進路指導に当たることは、もちろん良い面もあると思う。先ほどからすごくめまぐるしく変わっているというお話があったが、固定観念がない新しい先生が入ってきて、もしそれが若い人であれば、ITにも強いだろう。そういう先生と経験年数が長い先生がタッグを組めばとてもいい状態ができるのではないかと、いう考えを持っているが、経験の少ない先生が難しいということだけが問題として大きくなっていくのはなぜなのかが、少しわからない。何かをすればそれを補えるのかという先生のお考えがあったら伺いたい。

<村田校長>

- ・アドミッションポリシーについて、元々中学校から1点差で入学をしないで決めないでほしいという中学校からの要望だったが、自己申告書の指導が圧倒的に中学校の負担である。本当に読み込んでおけば、3行から5行程度で十分であると思う。アドミッションポリシーについても自己申告書についても量が多いと思うので、かなり軽くしていただきたい。
- ・2番めの3月の業務は、全く負担感はない。それより、早くに進学先が決まってしまって、学校にも来ない、学校にいても勉強しない子の指導の方がはるかに大変である。3月20何日まで授業があることは何とも思わない。
- ・工業高校では9月に就職が決まってしまって、そこからの指導が大変であったが、何年もそれで来ているので、内定と本決まりは違うなどの言葉を使って子どもたちに指導した。中学校は今よりもさらに遅いぐらいでもいいと思う。
- ・教員の経験年数について、おっしゃったようにタッグが組めたらいいが、今はそのような年齢構成になってないし、中学校はもっと小規模である。20人ぐらいしか教員がいないので、タッグを組めるような学校はほとんどない。例えば、10何クラスもあり、教員が60~70人いれば、タッグも組めるが、そのような学校もほとんどないので、可能性は薄い。

<小原委員>

- ・情報を何らかの形で、横で繋げればおそらく若い先生だけでも指導可能であり、その情報と繋ぐところが大事であると認識した。先ほどから繰り返されているような高校との連携、横の連携がもう少しあってその人たちとの情報共有ができれば、ある程度カバーされるという理解で合っているか。

<村田校長>

- ・コロナ禍前に、大阪府の進路指導協議会として府の進路指導の先生 456 人が集まった。一度みんなで会議しようと言ったことが 6 年前で、初めてであった。それまでは学区制もあり、市町村だけや、昔の学区制の 20~50 の中学校で集まっていた。それがやっと全校が会して、ベテランの指導主事の先生と若い進路指導の先生が連携をとろうとし始めたところだが、コロナ禍で集まることができなくなった。この 3 年は実施できており、大阪市の 129 校が年に 4 回集まるようにはしている。学校単体の組織ではもう人数的に無理であるので、そのようなことに取り組んでいる。

<浅野会長>

- ・3 人目は八尾翠翔高等学校の氣賀校長先生、よろしくお願いします。

<ゲストスピーカー | 氣賀校長>

- ・大阪府立八尾翠翔高校の校長の氣賀と申します。府立高校から見る入学者選抜として、私の経験からお話をさせていただく。
- ・はじめに、私の経歴を簡単にご紹介する。私は、平成 27 年度から校長として平野高校に着任し、港高校、現在の八尾翠翔高校と 10 年間で 3 校の校長を務めている。
- ・この後も触れるが、いずれも、全日制の課程普通科の学校で、平野や八尾翠翔は、府内全域から多くの中学生が受験するというよりも、地元の中学生が受験する学校。自転車通学の状況を見ると、平野高校が 9 割・港高校が 4 割・八尾翠翔高校が 8 割という割合。
- ・八尾翠翔高校の概要を簡単にお話する。本校は、全日制の課程普通科の専門コースに加え、知的障がい生徒自立支援コースを設置する学校である。普通科専門コースは、普通科の選択授業の時間を利用して高校卒業後の進路や学びの目標に応じた専門科目を学ぶことのできる普通科である。本校では 1 年生は共通の科目を学習する。そして 2 年生に進級する際に多様な進路に向けて学習する「総合系」または真ん中の色のついている 3 つの専門コースからコース選択を行う。知的障がい生徒自立支援コースは、知的障がいのある生徒が社会的自立を図ることができるよう、高校において一人ひとりの教育的ニーズに応じた支援を行い、「ともに学び、ともに育つ」教育を推進する環境を整備することから設置されている。本校ではこのコースを「クリスタル」と呼び、各学年 3 人の生徒が学んでいる。この子たちは原学級で総合系や専門コースの生徒と交流をするため、良い点は、子どもたちが優しく振舞えるところと思う。

- ・本校では、さらに特色化をすすめるべく、現在、さまざまな案を検討中である。スライドは現在の案だが、元気な学校作りのためにやっていることであり、中学生の観点で、どんな面白いことができるか学校全体で考えている。
- ・それでは、本日のテーマについて、主に3点に分けてお話する。
- ・はじめに、府立高校に求められることとお話する。
府立高校では、以前からカリキュラムや地域連携、学校行事等の見直しを図り「特色化・魅力化の推進」を進めるとともに、各学校に入学する生徒が3年間で成長し進路実現できるよう取り組んでいる。大阪では公立・私立関係なく自由な学校選択ができるとして授業料等無償化などの施策が行われるとともに、学校間の切磋琢磨が求められている。そのため、これらの取組みを効果的・積極的に広報活動を行うことが重要となってくる。また、効果的・積極的な広報活動に向けて、本校では学校説明会・中学校訪問に加え、各種広報により本校の魅力発信に努めている。スライドにあげているように、ウェブページや学校パンフレットのデザインを刷新するとともに、公式YouTubeやInstagram、Xを活用し、動画配信を中心に中学生にとって魅力ある広報となるよう注力している。これが本校のパンフレットだが、高大連携で大教大の学生さんに若い考えで作ってもらったもの。Webページはプロのデザイナーにお願いをして私学のホームページに負けないものを作成している。
- ・続いて、私がこれまでに経験した3校の入学選抜の状況についてお話する。
- ・はじめに、平野高校。平野高校着任時は、ちょうど現行の選抜制度が始まる年であった。平野高校は、中学校までに、学習のつまずきや不登校等を経験した生徒が多く入学しており、生徒の入学にあたり中高連携が必須であった。このような生徒にとって、入試で合格した経験は成功体験のひとつとなっていると校長として感じていた。私が着任する前の3年間では前期後期制の入試が行われていた。前期で合格した生徒の中には、目的意識が強くリーダーとなる生徒が多く、学校が活性化するきっかけとなっていた。卒業後の進路でもあきらめずに頑張る生徒もおり、現在、府立高校や中学校の教諭として活躍している生徒もいる。一方、現行選抜が始まると、2月に選抜が行われる近隣のエンパワメントスクールと競合するなど、志願者の確保に苦労した。
- ・次に、港高校。港高校は、110周年を迎えた伝統校で、弁天町駅から3分と近く、地元地域以外からも多く志願がある学校であった。1学年240人で約120の中学校から受験があった。校舎は8階建てで築30年、行事等が活発で、在校生の様子をみて、入学したいと思う中学生が多く高倍率の学校であった。校長として、進路保障と手厚さが必要と感じ、面倒見のいい、行きたい学校づくりに注力していた。
- ・続いて、八尾翠翔高校。概要は冒頭にお伝えしたとおり、特色はあるが、地域の志願者数の減少や交通の便がいい場所にある私学へ行きやすい環境もあり、私学無償化等の影響により、近年、志願倍率が低下し、志願者の確保に課題を感じている。
地元からは、「合格が早く決まる私学専願が増えている」、「定員割れした学校だから避けてしまう」といった声も聞いている。また、最近では、通信制を選択する生徒が多くなっている傾向もみられる。これは本校という意味ではない。
- ・本校でも、中学校時代にその傾向にあった生徒が入学したものの、結果的に通信制へ転学するケースもあり、さまざまな背景のある生徒をどのように受け止めるかも大きな課題である

と校長として考えている。オンライン配信などによる生徒支援も含めて手厚い、個々のニーズに応じた支援を公立で提供できる仕掛けが必要と感じている。

- ・次に、これからの入学者選抜に期待することについてお話しする。この間、高校教育を取り巻く状況は大きく変化している。社会の変化に応じ、学習指導要領が改訂され、大きく「学び」の内容が変容した。特に、高大連携改革を見ると、高校までに育成した、学力の3要素を大学入試で多面的・総合的に評価し、大学においては、それを更に向上・発展させて社会に送り出すといった一連の流れできている。大学入試は「共通テスト」の実施や入試のあり方の見直しが行われた。残りはCBT入試や教科横断型入試がある程度である。
- ・ここで大阪府の現行の選抜制度を見ると、90%の生徒を総合点順に合格とし、90%から110%をボーダーゾーンと呼び、その中の生徒のうちアドミッションポリシーに極めて合致する生徒を合格者とし、その残りを総合点の高い順に合格としている。1点刻みではない「学校の求める生徒像」に合致する生徒を優先的に合格するしくみがある。アドミッションポリシーを用いたこのしくみは、これからの学校を担う人材の確保として期待できる。その資料の1つに自己申告書があるが、自己申告書は選抜の資料としてではなく、15歳の今を振り返り、これからをみつめるきっかけとして導入されたと記憶している。平野高校着任時にこの制度が導入され、校長として「すごい制度ができた」「これからいろんな生徒が獲得できる」と期待した。生徒が自己申告書を作成する際に参考とする「求める生徒像」については、高校は、自校の特色を踏まえて作成する。しかしながら、「普通の普通科」では、どの観点も平等に取り入れようと考え、特定の部活や学校活動に絞って打ち出しをすることは難しく、どの学校も似たようなポリシーとなってしまう。実際私の勤務した3校でも大きな差異は見られない。また、これらをもとにすべての受験生が自己申告書を作成するが、例えば、平野高校では作文が苦手な生徒も多く、このことが負担となってしまう生徒もいるのではないかと感じている。自己申告書で書かなくても、何かキラリと光る「自分の良さ」を見せられるしくみができないかと思う。また、本校のように、募集人員を超えていない学校においては、このシステムを有効に活用し、合格者を選ぶことはできない。加えて、アドミッションポリシーにより合格したことを受験者本人にも伝えないため、アドミッションポリシーにより合格した本人も自覚的に高校生活を送ることができない。公立全体では、このシステムによる合格者数は制度導入当初は775人いたが、令和5年度選抜では202人と大幅に減少している。まず「この学校で」という生徒を合格とし、そこから総合点で並べるといったことができれば、学校の特色づくりができるのではないかと考える。
- ・今、国においては、国が求めるスクールミッションや3つのポリシーを策定し、学校の特色や魅力をしっかりと中学生や地域に示すことを求めている。これまで大阪の公立高校は、国に先駆けて、アドミッションポリシーを策定し、選抜に取り入れてきた。これまでの取組みを踏まえつつ、「学校の求める生徒像」に合致する生徒を優先的に合格するあり方を検討することができないか。例えば、最後に合格を決めるのではなく、初めに学校の求める生徒像に合致する生徒を合格にしてもよいのではないかと考える。そうすれば具体的な特色づくりにより早く近づけるのではないかと思う。例えば、強化指定の部活動を作るとか、英語に特化した学校としてやっていくとか、ユネスコスクールなど地域貢献やボランティア活動に邁進する学校にするなど、色んな特色づくりができると思う。

- ・今回、入学者選抜の改善について御審議いただいている、冒頭でお話したとおり、公立高校はどの学校も特色・魅力化のため、努力している。しかし、学校づくりの工夫だけでは難しいのが現状。それに対し、先ほどお話ししたアドミッションポリシーをさらに具体化し、生徒自らの主体性を評価し、学校の魅力化・特色化につながる生徒の獲得ができるしくみがあれば、その生徒を中心に新たな学校文化を作ることができ、生徒は自己実現を、中学生は在校生や卒業生をロールモデルとして学校選択ができ、より望ましい循環が生じるのではと考える。
- ・選抜日程を見てみると、現行選抜は合格者決定から入学までの期間が非常に短く、入学事務や中学校連携が慌ただしいのが現状である。上段には、選抜の日程、下段に高校の日程を示しているが、通常の授業や単位認定、進級や卒業に向けた指導と並行して選抜日程がある。入試期間中は校内立ち入り禁止になる期間がある。在校生の指導が十分にやり切れないという現実もある。ここに大学入試に向けての指導、大学入試日程を重ねると高校の選抜日程と並行して実施されている。入試期間中は部活動等も含め、在校生の指導に制限がある。「部活するなら私学へ」という話も中学側から聞く。部活をやりたい、しっかり勉強したいと思う在校生のための指導が課題となっている。また、中学生が部活するなら私学という形で流れて、200人の野球部、200人のサッカー部という状況にあり、行きつく先が本当にそれでいいのか、部活をやりたい生徒にとって活動が保証されているのかも問題だと思う。
- ・さらに、合格者決定後には、中学校訪問、クラス分け、合格者登校を実施し、時間割の作成など次年度の準備を行っているが、非常にタイトな日程の中、先生方には頑張ってもらっている。特に、二次選抜を終えてからの入学準備は時間がない。高校がしっかりと入学生を受け入れるためにも十分な時間が必要。合格者数が決まらなければ、次年度の学校体制づくりもなかなか難しい状況にある。中学校のことや私立学校のことを考慮せずに我々だけの思いとしては二次選抜の合格者発表が最低でも2週間早めていただけないかと校長として思う。
- ・最後にまとめをする。これまでに大阪の公立が取り組んできた「すべての子どもたちが受験できる機会の確保」や「各学校の特色づくりが活かされる枠組み」は大事だと思っている。これに加えて、選抜時期、選抜機会、学校づくり、在校生指導等の観点で、ボリュームゾーンとなる普通科をはじめとする公立高校には必要だと考えている。
- ・スライドはないが、今日一番お伝えしたいことがある。この春の入試で私立高校の専願者は約32%と、過去20年で初の3割台になったと聞いている。一方、公立志願者数は、昨年と比べて、マイナス約2,400人です。40人クラスで60クラス。6クラス規模の学校なら10校分。平均倍率は1.05倍で、昨年度の1.13倍から8ポイントマイナス。定時制・通信制以外の145校のうち約70校が定員割れ。経済的な理由で私学を選択できなかった子どもたちが、授業料無償化で自由に選択できるようになった結果とコメントがあった。そのコメント通りだと我々は真摯に思わないといけない。いつかこうなったらという危機感が我々には少なかった。それまでもっとやれることがあったんだと思わないといけないと思う。今でも、私学の費用は公立より20万円程度は多くかかると聞いている。それでもこの結果になった。そして、まださらに2年間をかけてこの制度は浸透していく。他府県私学の制度参加も25校からもっと増えていくはず。このまま何も変化しなければ、さらにこの傾向が加速化していくと懸念している。我々は現実を見つめて、考えないといけない。授業料についてのハードル

が下がっただけで本当にこうなっているのか。1 学年 1,000 人の学校や、200 人の学校がある中で、何を比較しているのか。同じ規模の学校の比較をしているのか。校数や倍率の比較にそもそも意味があるのか。試験制度や試験の時期についても見直しがあるのではないのか。我々はいかにその存在意義を保って地域の子どもたちを支援していくことができるのか。教育の空白地帯を作らずに、どの地域の子どもたちにも通学に苦勞するような環境を作ってはいけなし、授業料以外の費用負担はやはりできないという家庭の子どもたちも高校生活を生き生きと送れる環境づくりをしないといけない。公立の教育は約 150 校それぞれに役割、特色、強みがある。各校がそれぞれの役割を果たし、特色や強みを生かしていくことが様々な子どもたちを誰一人取り残さず受け入れていくことにつながると思う。中学校を卒業した子どもたちを公立高校全体で次の学びにつなげていくことが我々のミッションではないでしょうか。

- ・私学・公立を含む府内の高校の特色や、役割というバランスが、重要だと思う。私立の高校に大きく偏ったり、全日制・定時制・通信制のバランスが大きく偏ってしまったりすると、さらに公立の持つ役割を発揮できなくなってしまうのではないのか。公立高校には、少子化といわれる時代に子どもたちや地域になくてはならない大事な学校となるような特色づくりが必要だと思う。平成 23 年に前期入試を行うきっかけとなった、同じような定員割れがあった。あの時も大きな危機感を感じたが、教育庁の皆さんがその翌年に策を打ったそのカウンターが効果を示し、公立の存在をしっかりと堅持することができた。あの時と同じように素早いカウンターが今回は求められていると感じる。時間的な余裕はない。急速に変化する時代に、大阪の子どもたちの教育を支えられる公立高校の役割を失わないためにも、早急に今後の子どもたちにふさわしい入試制度改革や入試時期の見直しをお願いしたい。
- ・本日はこのような機会を与えていただき、ありがとうございました。

○委員とゲストによる質疑応答。

<浅野会長>

- ・ありがとうございました。氣賀先生のお話を伺った。質問を受け付ける。いかがか。最初に 1 点聞かせてください。最後の氣賀先生のお話は非常に心に染み入った。今回私学の無償化の影響もあって、このような状態になったが、学校現場の先生方の危機感はどうか。校長先生と同じほどの危機感を持っているのか。関係ないと思っているのか。

<ゲストスピーカー | 氣賀校長>

- ・関係ないとは誰一人思っていない。それほど、今回の状況はセンセーショナルなものである。先生方は先ほど話した平成 23 年の定員割れの事象以上のものと感じていると思う。

<浅野会長>

- ・高校の先生方にも何かアクションを起こしたいという気持ちは醸成されているのか。

<ゲストスピーカー | 氣賀校長>

- ・公立高校の先生方は、過去からの広報活動や、その学校の売り込みとか特色とかいうものに対しての流れを皆さん知っている。そこまで肩入れをするというか、本気になるというか、強い思いが今までやはり湧いてなかったんだと私は思う。先ほど言いましたとおり、私達は本当に真摯に受け止めないといけないと思う。ただ、今回のこの出来事は、どの学校の先生方も、本当にしっかりと考えて、もう1回やらないといけないと考えていると思う。

<小酒井委員>

- ・有意義な話を伺うことができ、まずは御礼申し上げます。私から2点質問がある。
- ・1点め。アドミッションポリシーによる合格で入ってくる生徒については、そういった生徒が多いことによって学校の特色作りをしていき、その特色がより効果を表すと伺った。先ほど平野高校の時代に前期入試で入ってくる生徒は、のちのちリーダーになるような資質がある生徒だったということだが、両者は同じような性質を持った生徒で、今後もそういった人を取っていくことが、高校の特色化をドライブしていくことに有意義なものとして考えるべきなのか意見をいただきたい。
- ・2点め。3月の忙しさの件で、私もこの審議会で指摘をしたが、思った以上に3月は非常に忙しいことが分かった。立ち入り制限があるときに、入試上の指導等に何かどうしても足りなさを感じてしまう点を改めて教えてほしい。

<ゲストスピーカー | 氣賀校長>

- ・ご質問ありがとうございます。
- ・まず、1点め。前期入試のときは、その学校に行きたいと思う子どもたちが、まず前期を受ける。その部分の思いというのがやはり強かったと感じている。その部分で子どもたちに活力があって、目的意識を持った子どもたちだったのではないかと、個人的な感覚だが、私はそう分析している。アドミッションポリシーに関して、本当に合致した子どもたちは、その学校が求めているところに、非常に近い子どもたちと思っている。もちろん中学校の自己申告書に対する書き方の指導もあるが、私の経験上でも、やはり同じような傾向があると感じている。
- ・2点めに、3月の忙しさの件だが、先ほど言わなかったが、さらに忙しい学校もある。本校では、特色選抜にあたる期間に、自立支援コースの入試がある。特色選抜をやって、一般選抜で、普通科や専門学科と2学科を設置する学校もある。そういう学校の入試はもっと忙しくなる。先生方は入試をする中で、卒業式、それから進級判定、それから卒業判定と、生徒の一生を左右するようなことをずっと並行してやっている。これはもちろん中学校の先生も同じだが、絶対に学校の先生として学校として失敗をしてはいけない、取り返しがつかないことをずっと並行してやっている。ですので、本当にストレスが非常に大きい時期になる。そして、今回のように、倍率1倍を満たさなくて、二次入試をやってしまうと、そこまで最後の合格発表まで、最終の入学人数がわからず、クラス分けもできない。先生方の時間割が決まらない。時間数が決まらないと、もちろんそこからの時間割を作成することもできず、全てが遅くなる。そういったことが忙しさにつながっていると思う。

<川田委員>

- ・ご講演ありがとうございました。先生の危機感がよく伝わる印象を受けました。
- ・今、先生が考えるベターな選抜日程を教えてください。もう1点は八尾翠翔高校では私学と間違えるぐらいのパンフレットや、YouTube、インスタがある。大抵の場合、予算が非常に厳しいと聞いているが、どうこれを解決したのか。

<ゲストスピーカー | 氣賀校長>

- ・ご質問ありがとうございます。
- ・1点めについて、ベターと思う日程は最後に熱弁しすぎたが、最低で2週間、本当は3週間前倒ししてほしい。ただ、そうすれば私学も前に上がってしまうことも想定されるので、もっと根本から変えることが可能であれば、それもいいと思う。順番が決まっているわけではないと私は思っている。
- ・2点めの予算は、本当にありがたいご質問だと思う。本当に公立高校は予算面で苦勞している。同じようなことを皆やりたいと思っているが、予算確保で苦勞している。本校は、高大連携というチャンスを得たことによって、大学生の若い感覚で、大学の授業の一環としてあのパンフレットを作っていたいたため費用は抑えられた。もう1点、ホームページについては、プロのWebデザイナーが偶然、翠翔の広報活動を知り、向こうの方から、これぐらいの予算でということをお話をいただいた。我々が今まで頑張っていたことをすごく理解いただき、協力的に安価でやっていただいた。

<小原委員>

- ・ありがとうございます。質問が3点ある。
- ・倍率が低くなること自体は、本当は問題ない気がする。問題があるとすると、その倍率で比較されることだと思っている。学校に入ってくる子が、より公立を望んでくる子に限定される、そういう親に限定される。そして人数が減れば、教育はもっと良い教育で、同じ先生の数だから、もっと良い教育を出せる可能性もあり、質は高まることに繋がるかもしれないので、もうそれ自体が問題ではなく、先生という、どこの何々の高校の先生という立場ではなく、「先生」であれば、子どもが正直なところ、教育をちゃんと受けられるなら、どこの私立であろうが公立だろうが、受ける時間が長くなることは喜ばしいことであって、行きたいところに行くのは悪いことではないと思う。公立に強みがあると思っているが、今日紹介してくださった先生のこの経験のように、普通は出せていないように思う。
- ・私は労働環境が専門だが、大企業と中小企業で広告を打つと同じような問題を抱える。大企業はお金を持っているけど、中小ではあんな広告はできないとなる。しかし、実際は人事で自分たちの会社を広告しないとイケない人たちが、中身をよくアピールできない、強みをアピールできないという問題を抱えていることが、実際の社会にはある。教育の現場ではわからないが、なぜ公立が公立の良さを強くアピールできないのか、そこに何か問題があるならヒントをいただきたい。

- ・ 2つめは、それに関わって、高大連携で今これができたきっかけは何か。パンフレットを変更しようと思ったきっかけが知りたい。それがわかれば、今何もしていない公立高校もきっかけを持てると思う。
- ・ 3つめは、私達は目標として入試時期を早くすればよいのか、入学者数を確定させることのどちらか。

<ゲストスピーカー | 氣賀校長>

- ・ ありがとうございます。まず1点め、公立がアピールできない理由が何かあるのかについては、特にそのような理由はないと思うが、予算的に厳しいということはある。
- ・ 2点めのパンフレット制作のきっかけとして、先ほどの高大連携は、本校は柏原東高校と機能統合した。その柏原東高校が行っていた大阪教育大学との連携を引き継いだ形で、我々が活動した結果、今回のことに結びついた。パンフレット自体を変えようというきっかけは、私学とどこに差があるのかを広報で考え、やはりグッズというか目に留まるものをまず私学と同じにしようとなった。動画配信も同様。私学と公立との大きな差は、動画を使っている広報を行っているかどうか。また、SNSを使った広報を行っているかどうかがある。その部分を縮めようという発想だ。
- ・ 3点めは、誤解を受けるような発言をしてしまったのかもしれないが、合格者数を決めたらよいということではない。もちろん合格者数が決まらないと動かないが、あの過密スケジュールを何とか緩めないといけない。新しく入ってくる生徒の情報を聞き、そして十分時間をかけてクラス編成し、新入生の指導を行い、そして迎えるという部分に支障が出ている。加えて、在校生に関しても、進学指導や、それから追認定指導、単位取得の指導に関しても、本当に時間がない。もっと時間をかけて手厚くやりたいところが入試時期を前倒ししてほしいという理由。

○浅野会長より、今回の意見を踏まえ、継続審議できるよう事務局で準備するよう指示。

(2) 閉会

- 閉会にあたり、教育長よりあいさつ。
- 事務局より、次回開催は改めて連絡する旨、連絡。
- 閉会